

すもも

朝奈夕菜

立ち尽くす私を横目に、ミミは一糸纏わぬ姿のま

まベッドの縁に腰を下ろした。都心から少し離れたホテルの一室である。時間はおよそ午後十時を回った頃か。

「で、遊ぶ気なんて無かったあんたが、あたしと何をしたいの？」

軽く癖のついた赤毛を指で弄りながら、ミミは私にいった。

「あたしは別に男でも女でも、両方いける口だけど？」

「あなたに、少し話を聞きたいのよ」

ふうん、といったような表情を見せるが、視線を私に合わせようとはしない。

「そう。まあ、この際何だっていいわ、お金さえ貰えれば」

援助交際、ミミはその界限でそれなりに有名な人間だった。ある捜査の中で彼女から話を聞く必要が生じ、ミミに接触を謀ることとなった。そして今夜、実際にミミと会ってみて、私は驚きを隠すことが出来なかった。もしかすると高校生ですらないのではと疑いたくなるほどに、ミミの顔や身体つきには幼さが残っていたのである。

ぶつ、とミミは突然吹き出したかと思うと、

「にしてもさあ、さっきのあんたの変装はないよね。あたしあの時、あんたに殺されるかレイプされるかと思ったもん」といった。「ホント、今になるまで全く気付かなかったなんて、ミミ、ショックー」さつきハンガーにかけた黒いロングコートや、ドレスサーの上に置いた紳士用の帽子とサングラスを見て、ミミはまた笑い出し、腹を抱えてベッドの上を転げ回っている。

こうして笑っている姿を見る限り、ミミは見た目に相応な少女だった。どうしてこんな少女が援助交際なんかないか――。

「ねえ、ミミちゃん。ミミちゃんは、どうしてこんなことをしているの？」

「そんなの、お金が欲しいからに決まってんじゃない」とミミは笑いながらに答えた。「あたしみたいなこととしてる人たちって、ほとんどみいんなそうだよ？」

「お小遣いが欲しいなら、別にアルバイトだっていいんじゃない。そのうちあなたも社会に出て、きちんと働くことが出来たら、自分で好きに使えるお金だっていくらでも手に入るわ」

「――だったらさ、いつになったら社会に出られるの？」

ミミは笑うのをぴたりと止めた。ベッドで仰向けになったまま、そこから動こうとしなくなった。

「それは」

「それは大人になってから、っていいわけ。二十歳になってから、学校もちゃんと卒業してから、そういいたいの？」

「当たり前じゃない」

「ふうん」

ミミはつまらなさそうに天井を見ている。依然私からは視線を逸らしている。

「あたしが援交してる理由ね、あれ半分ウソ。お金欲しいのはウソじゃないけど、本当はやりたいことだからしてるの、これ。やりたいこととして、お金も貰えるんだから、一石二鳥つてやつじゃない？ わざわざしんどい思いしながらお金稼いでるなんて、ばっかみたい」

ふざけないでっ、という衝動にも等しい言葉を私は何故かこらえてしまった。

「社会でも、自分の趣味で生計を立てていける人だっているわ」

「でも、それはごく限られた人なんじゃない？」

「それでも、そう努力するだけの価値はあると、私は思うの」

その代わりに発せられた言葉が、決して間違っていないにしろ、こんな歯が浮くような台詞でしかないことが、私は恥ずかしくてならなかった。ミミも「おお、寒い寒い」といって腕をさする素振りをし

た。それが余計に私の羞恥心を掻き立て、私の顔を紅潮させる。

ミミは仰向けに寝ていた身体をむくりと起こすと、ようやく私に視線を向けた。くりつとした目が、食い入るように見つめてくる。

「ねーねー、おばさんって年いくつ？」

頭に血が上ったように熱い状態では、売り言葉に買い言葉だった。

「二十八よっ」

「あは、じゃあやっぱりおばさんじゃーん」

「——っ」

一瞬手を上げそうになった自分を、今一度落ち着かせる。これでは子供の喧嘩ではないか。深く息を吸い、そしてゆっくりと吐いた。それを数回繰り返す。大丈夫、頭に上った血もだいぶ落ち着いてきた。

「ごめんなさい」

私はミミに謝罪し、場の仕切り直しをする。ミミは相変わらずベッドに腰掛けたまま、こちらを見ていた。ふと、ミミが大きく伸びをする。今まで無防備だった乳房や脇がさらに無防備になる。

「ねえ、あんたって、こんなふうに誰にでも自分の裸って見せられる？ あたしみたいに」

ミミが挑発的な笑顔を見せる。あんたには無理だろう、と。

「そ、そんなの、見せられるわけじゃないじゃない」

待ってましたといわんばかりに、その笑顔がより強くなる。ミミはベッドの上に片足を立て、私はその足の動きを目で追った。

「それってさ、つまりあんたは自分の身体に自信がないからなんでしょ？」

「……」言葉を返さず、ミミの二の句を待った。

「若い頃の身体が、今はもう保てていないから。その差に絶望して、コンプレックスになっちゃったんじゃない？」

ミミはベッドから降りると、私の方に歩み寄ってきた。四、五歩くらいの距離はすぐに詰められ、私の前に立った。ミミは私の二の腕や腹、胸なんかを服の上から触り（あるいは掴み）、そして、ふふん、と笑った。

「やっぱりそう、あたしもいつか、こんなふうになるんだ」

ミミは言葉を、独り言のように続ける。

「女は熟れるのが早いから、当然、腐るのも早くて、十歳頃から熟れ始めて、だいたい十年くらいしかもたないの。後はもう、ねえ、わかるでしょ？」

社会に出て、働いて、お金も貯まって、ようやくやりたいことができる頃には、自分はまだ腐った果実でしかないの。そうなったら、後は虫に喰われる

のをただ待つだけの人生。そんなのいやっ。ねえ、それでも大人は、そういった人生をあたし達に強要するの？　ねえ、答えてよっ」

唐突に、いつしか悲痛な面持ちとなって私の服を掴み、訴えるようにミミは叫んでいた。不安に押し潰されないように、必死で抵抗して、癇癪を起こしてしまった、そんなあどけない少女が、目の前にいる。答えてよっ、答えてよっ、と、私に泣きついてる少女が。

「たぶん」私は無意識に言葉を紡いでいった。「たぶん私達は、あなた達のことを羨ましいんだと思う。自分達が無くしてしまって、もう二度と手に入らないものを、あなた達はまだ持っているんだもの。要するに、嫉妬ね。社会なんて、所詮はそんな醜いものから成り立っているんだから」

ミミは泣き止んでくれなかった。私の服を掴んだまま、離れようとしなかった。

この子は、いったい何者なんだろうか。子供の身でありながら、その感性は驚くほどに鋭い。まるで心が身体に先行して、何倍もの早さで成長しているようだ。それは決して幸せなことではないだろう。

私は、この少女を愛しく思い始めている自分に気付いた。もしかすると、それは憐れみにも近い感情かもしれない。しかし今ここで、ミミを抱き締めずにはいられなかった。

「大丈夫よ、ミミ」

ミミも強く私を抱き締めた。そうして、徐に私の手を引き、そのままベッドの方へ向かっていった。

「ミミ？」

私はベッドに押し倒される形で仰向けになり、ミミがその上に覆い被さってくる。そして慣れた手つきで私の服を脱がそうとする。情けないが、抵抗する暇さえなかった。

「ちよつと、ミミ——」

「ねえ、お願いがあるの」

手を休めることなく、ミミが言葉を続ける。

「後、何年か経ったら、あたしを殺して」

「え」

「虫なんか、あたしは喰われたくないの。腐っちゃう前に、あんたにあげる」

私はミミのなすがままにされていた。

「ねえ、お願い」

不思議と迷いはなかった。私はミミに微笑みながら、ゆっくりと首を縦に振った。ミミの目から雫が落ち、私の頬を濡らした。

——ありがとう。

声には出さず、ミミの口がそう動いた。それから誓いをたてるように、ミミの口がそつと私の口に触れた。